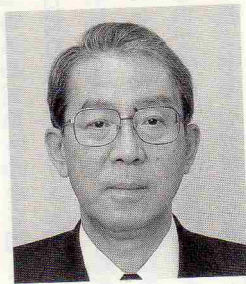


中世写本と楽しんだ日々



原野の昇

文学研究科教授。パリ大学文学博士。一九四三年生まれ。広島大学文学部卒業。同大学院博士課程中途退学。広島女学院大学文学部講師、同助教授、広島大学文学部助教授を経て現在に至る。専門は『狐物語』を中心とするフランス中世文学・語学。著書として、『フランス中世の文学』（広島大学出版会）、『狐物語』（岩波文庫）など。

目の前にあるのは、まぎれもなく本物の羊皮紙写本、フランス中世の『狐物語』のC写本です。ここはパリ国立図書館の写本室です。係の人が無造作に置いていったその写本を前にして、私の胸は高鳴り、このような貴重なものを要求して、私の机まで持ってきてもらう資格が私にはあるのだろうか、震える手で、恐る恐るその写本に触れました。羊皮紙写本の実物を目にしたのは、その時が初めてでした。それまでは、写真版で『狐物語』のテキストに触れていたのです。日本からやって来た一学生に、重要文化財級と言っても過言ではないくらい貴重な古文書がかくも大胆に、どうぞご自由に使いなさい、と目の前に置かれているのです。感激して体が震えるのも無理はありません。中を開けると、紙の原材料が動物の皮であることが、毛穴らしき跡が残っていることからすぐ分かりました。これが羊皮紙というものか。褐色がかつたインクも鮮やかであり、六〇〇年の時の隔たりを感じさせません。写真版では絶対にもつことができない迫真力があります。文字が生きています。

学位論文のテーマは、『狐物語』一篇の未校訂写本による新校訂でした。それからパリ国立図書館にはよく通いました。写本室だけでなく、建物の入口を入ってま正面にある

大きな一般閲覧室もよく利用し、大学の授業が無い日など、朝の開館時から夕方閉館時まで居たこともたびたびでした。

学位論文で扱ったのは『狐物語』のごく一部でしたので、帰国後、C写本全体の校訂本を出すことを企てました。最初に勤務した広島女学院大学時代の五年間と、次いで勤めた広島大学文学部の最初の数年間は、もっぱらこの作業に専念しました。主として夏休みを利用しました。広島女学院大学時代、広電バスの終点は校門のはるか手前でしたので、そこから約二〇分かけて牛田山の坂道を、蝉しぐれを聞きながら、毎日毎日登って行きました。広島大学に移ってからも、この作業は続きました。当時広島市東千田町にあった文学部での私の研究室は正面玄関の真上の三階にあり、したがって西に面していました。冷房などはなく、夏の午後は蒸し風呂のようでした。ランニングシャツ一枚になっても、汗が吹き出ます。おまけに部屋は運動場に面しており、サッカー部が練習をすると、舞い上がる砂埃がものすごく、それが風に乗って、開け放たれた窓から入り込みます。一時間もすれば机の上は真っ白になり、さらさらです。本は痛むし、この暑さとの戦いには苦勞しました。やむなく午後は大学内のプールで一泳ぎし、研究室に帰ってソファで昼寝し、その

後作業を再開したこともありましたが。そのような真夏の研究室に毎日毎日出かけて来る私を見て、同じ階のある先生から、「原野さんはよほど奥さんに嫌われているんですね」と冗談を言ってからかわれたりしたこともありましたが。しかしこちらには、未校訂写本による新校訂本完成という目標がありましたので、そのような時間ももてる夏休みは楽しくてたまらない日々でした。

C写本ともう一つの写本のマイクロフィルムを現像した写真版を基に、一行一行活字に転写していきました。この転写作業も、単なる機械的な作業ではありませんが、これは次の段階の本格的な校訂作業のいわば基礎資料作りです。その後、その転写済みテキストを解釈し、句読点をつけていくと同時に詳しい注釈をつけ、難解語彙の語義を確定していきます。これが校訂作業の核心部分ですが、これは先行研究をできるだけ網羅的に参照し、各種の辞書、文法書、研究書ができる限り多く参照しなくてはいけません。したがって、テキストのある一箇所の問題を解決するために、何日も何日もかかってしまうこともしばしばです。そこで、同じ考えをもっていた研究者仲間二人と共同で行うことにしました。その結果、約一〇年後に『狐物語』C写本全体の校訂本を刊行することができました。(フ

ランス図書、第一巻、一九八三年、第二巻、一九八五年)これは大きな反響を呼び、『ロマニア』をはじめとする主要な専門学術雑誌の書評で詳しく取り上げられ、非常に好意的に迎えられました。第一巻には、その年に出版された校訂本のうちで最も優れたものに与えられるラ・グランジュ賞をフランス碑文文芸アカデミーから授与されました。この校訂本上・下二巻の刊行が基礎となり、『狐物語』の紹介書『狐物語の世界』(東京書籍、東書選書、一九八八年)、翻訳『狐物語』(白水社、一九九三年)、同『狐物語2』(溪水社、二〇〇三年)、同、岩波文庫版『狐物語』(二〇〇二年)、『狐物語』のコンコードダンス(溪水社、二〇〇一年)、現代フランス語との対訳版*Le Roman de Renart, Editions générales, Livre de poche, Collection "Lettres gothiques"* (二〇〇五年)の出版へとつながりました。

このように、パリで学位論文を準備した三年間(二四〜二七歳)、広島女学院大学での五年間(二八〜三三歳)、広島大学文学部着任後の数年間(三三〜三六歳)に推進した『狐物語』未校訂写本による新校訂の仕事が、これまでの私の研究生生活の基礎をなすものでした。それは、羊皮紙写本およびその写真版を相手に楽しんで日々でした。